説教要旨「平和への道しるべ」

マルコによる福音書　９章　３３～４１節

「だれでも一番先になろうと思うならば、一番後になり、みんなに仕える者とならねばならない」（３５節）。

イエス様は、誰が一番偉いのかと論じ合う弟子たちにそう告げました。そして、イエス様は「幼な子を受け入れる」ことを弟子たちに求められたのです。この当時のユダヤ社会では、幼な子と女性は一人前の社会の成員とはみなされていませんでした。特に幼な子は人間としては価値の小さいものとみなされていたのです。幼な子を受け入れるということは、自分にとって得にならないような相手をも神に創られた一人の人間として大切にすることです。幼な子に仕えたところで目に見える報いは期待できないし、人々からも注目されないかもしれません。しかし、幼な子を大切にすることは、わたしを大切にしてくれることなのだ、とイエス様は言われるのです。

十字架へと歩まれるイエス様に一杯の水すら差し出すことの出来なかいわたしたちです。けれど“幼な子”、つまり社会から価値のないものとされているような誰かのところにいって手を差し伸べることは出来るのではないでしょうか。それこそが、イエス様が、そして神様がわたしたちに望んでおられることです。イエス様に一杯の水を飲ませてあげることすらできないわたしたちのためにイエス様は、十字架の苦しみと死とを一人で背負って下さり、わたしたちの罪を赦し、その救いの御業のために働く道を示してくださっているのです。

イエス・キリストが人となってこの世に来て下さったのは、敵意を向けるわたしたちをも、その愛によって味方へと変えて下さるためでした。独り子の命をも与えて下さった神様は、わたしたちのことを諦めないのです。人を敵として見つめ対立していくのではなく、友として見つめて行くこと。それは人が自分と違っており、自分の意見に従わず、自分を尊重しないからといって怒り、批判し、攻撃するのではなくて、たとえいろいろ意見は違っても、根本のところで共通しているならば、互いを尊重してくことです。そのようにして共に歩む味方を増やしていく先に、本当の平和があるのではないでしょうか。

（２０２２・８・７　説教者：稲垣真実）